

## 動物表象文化論

—— アフリカ諸社会における王権，図像，歴史表象 ——

阿久津 昌 三

### 1 はじめに

イコノロジーは、本来、西洋のキリスト教に由来する<sup>アイコン</sup>図像の学として発達し、これを適用した東洋の美術史学では仏教図像学として展開している。W・J・T・ミッチェルは、『イコノロジー—イメージ・テキスト・イデオロギー—』（鈴木聡・藤巻明訳、東京：勁草書房、1992年）のなかで、「イメージに関して何を語るべきか」「イメージは何を語るか」という二つの意味から、イコノロジーとは「イメージの修辞学」である、と述べている。つまり、イコノロジーは「アイコン」（イメージ、絵画、あるいは似姿）の「ロゴス」（言葉、観念、言説、あるいは「学」）を研究するものである（W. J. T. Mitchell, *Iconology: Image, Text, Ideology*, Chicago: The University of Chicago, 1986）。

アフリカを対象とする民族芸術学では、最近では、原始美術、未開美術というものの見方から、図像の背景にある歴史表象、図像の受容と伝播などとの相関関係をたどる「イコノロジー」の発想をとり入れた新しい見方をとりいれている。このような研究は、美術史学というひとつの領域にとどまるものではなく、生物学、考古学、歴史学、民族学などの諸学問との学際的研究という形をとって展開している（Tim Ingold (ed.), *What is a Animal?*, London: Unwin Hyman, 1988; Howard Morphy (ed.), *Animals into Art*, London: Unwin Hyman, 1989; Aubrey Manning and James Serpell (eds.), *Animals and Human Society*, London and New York: Routledge, 1994; Robert Layton, *The Anthropology of Art*, 2nd ed., Cambridge: Cambridge University Press, 1991）。このような学際的研究によって、アフリカを対象とする美術史学及び民族芸術学もまた新たな変貌をとげつつあるのが現状である（Herbert Cole, *Icons: Ideals and Power in the Art of Africa*, Washington, D. C.: Smithsonian Institution Press, 1989; Allen F. Roberts, *Animals in African Art: From the Familiar to the Marvelous*, New York: The Museum for African Art, 1995）。

川田順造は、ブルキナファソのモシを対象として、「物質文化と技術」（ものとひととの関係）、「社会関係（特に、政治組織）」（ひととひととの関係）、「言語」（ひととことばとの関係）という三つの層において分析している。これらの一連の研究のなかで、川田は「歴史表象」について次のように述べている。

「過去はそのまま歴史ではない。過去を想起し、現在との関係で表象すること、そこに歴史の成立する最低の条件があるだろう。従って歴史としてとりあげるのは、ある視点から想起され、解釈されて再提示（represent）された表象（representation）であって過去の事実

そのものではない。過去を表象する行為においては、記憶によって直接想起される事象についても、想像力は記憶と分かちがたく結びあわされて働くが、過去の同時代史料に依拠する場合でも、そこに読みとられる過去のしるし—それ自体すでに事象の同時代者により<再提示>であることが多いが—を再提示する者の現在から過去に向かって働く想像力が、大きな役割を演じる」(川田順造「肖像と固有名詞—歴史表象としての図像と言語における意味機能と指示機能—」『アジア・アフリカ言語文化研究』48/49 (1995): 496, また、川田順造『口頭伝承論』, 東京: 河出書房新社, 1992年などを参照されたい)。

アフリカにおける王権の標章は、「象」「豹」「鯨」「鶏」「羚羊」「蜘蛛」「獅子」「鱷」「蛇」「蛙」などの動物の表象で彩られている。これらは、王の名称を指示するものであったり、王や民衆の隠喩となっていたり、性差や身分標識を表わしていたり、神話的・寓話的表現であったりする。しかしながら、王権の標章にみられる図像的表現は「個」よりも「類」を示すのに適している。図像が「個」を示そうとする場合には、「写實的に個そのものを再現すること」と「図像の中に描かれた属性ないし標章によって」という二つの方法がある。第一の方法は、ヨーロッパで発達した肖像画、肖像写真に典型的に見られる(だが、その場合でも装飾品、服装、背景などによって「個」をよりよく指示するために標章が用いられている)。第二の方法は、アサンテの王の椅子に見られるもので、これらの椅子には個々の王を表わすX字形や輪形の鎖などの抽象的なしるしが彫られている。この意味では、図像的表現は「個」よりも「類」を示すのに適している。

川田順造は、図像的表現と口頭伝承との関わりで、次のように述べている。

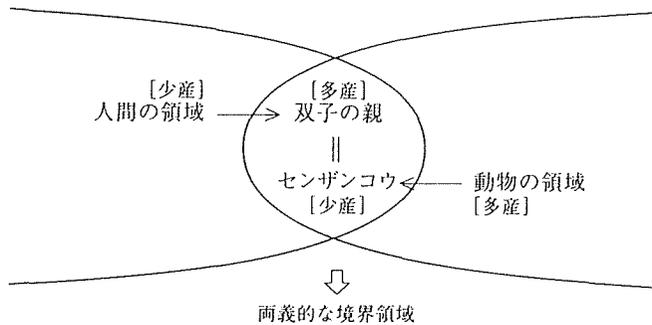
「歴史の表象としての図像が、たとえどんなに写實的に対象を表わしていようと、……それが歴史上のどの<個>を指しているのかを示す別のしるし—口頭伝承—がなければ、図像だけでは<個>の指示機能は充分ではない。ここでは、……時間の中をそれ自体変りにくいものとして伝えられる媒体によるメッセージ(〔ベニンの〕青銅の図像)と、くり返し更新されるメッセージ(口頭伝承)が相補う関係で、しかし前者が後者を図像で表現するだけでなく、逆に前者を説明する形で後者が生まれるという関係でも、併存しているのである」(川田順造『アフリカの心とかたち』, 東京: 岩崎美術社, 1995年)。

これに関しては、アサンテにおける語り部たちによって演じられる「王の賞賛歌」という口頭伝承によるテキスト分析という形で、また、アフリカにおける図像的表現をめぐる民族の想像力については、「図像と物語」(『岩波講座文化人類学 神話とメディア』所収, 岩波書店, 近刊)において発表する予定である。

本稿では、アフリカ諸王国の事例をとりあげ、王権の標章に関して、特に、動物の表象を中心として、その図像学的な意味と歴史表象とを比較研究することで、その基層文化を明らかにするための基礎的な資料を提示することが目的である。

## 2 不思議な動物

特定の動物が神秘的な力をもつという観念は世界の諸民族に広くみられる。メアリー・ダグラスは、アフリカのザイールの熱帯降雨林に生活するレレと呼ばれる社会を調査対象とし



第1図 不思議な動物

レレ社会では、動物の領域のセンザンコウ以外に、人間の領域にも、人間と動物と精霊という三つの領域を仲介する特別な役割をもった媒介者に「双子の親」がいる。多産というのは動物の特徴であるが、その例外に、少産のセンザンコウがあげられる。つまり、双子の親とセンザンコウは精霊とのつながりをもつ機能をはたしている。ここには少産と多産、人間と動物という座標軸における逆転の図式を読みとることができる。

て動物の象徴性を明らかにした (Mary Douglas, “Animals in Lele Religious Symbolism,” *Africa* 27(1)(1957): 46-58 [*Implicit Meanings: Essays in Anthropology*, London: Routledge, 1975 に収録]; Mary Douglas, *Purity and Danger: An Analysis of Concepts of Pollution and Taboo*, New York and Washington, D. C.: Frederick A. Praeger, 1966, 塚本利明訳『汚穢と禁忌』東京:思潮社, 1985年; “The Pangolin Revisited: A New Approach to Animal Symbolism,” (in) Roy Willis(ed.), *Signifying Animals: Human Meaning in the Natural World*, London: Unwin Hyman, 1990, pp. 25-36)。

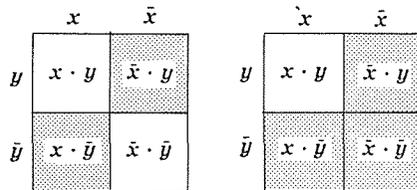
レレ社会ではセンザンコウを儀礼の対象としている。この動物は体は鱗におおわれ、爬虫類のような形をした、実は哺乳類という奇妙な動物であるが、この動物には神秘的な力があると信じられている。センザンコウがなぜ多産の源泉とされているのかについて、吉田禎吾は、『魔性の文化誌』(東京:研究社出版, 1976年)のなかで、次のように説明している。

「これはレレ族の宗教的な世界観に関連している。すなわち人間の出産力は奥深い森の湿地帯に住んでいるとされる精霊に左右されると信じられ、水と人間の出産力を支配する精霊とは象徴的に結びついている。……陸にいますが、外見が魚に似ているセンザンコウ……は、精霊と結びついている。このように、センザンコウが魚の鱗に似たものを持っていることから魚と象徴的に結合され、水に住む魚が精霊—生殖力を支配するとされる—と結びついているので、この動物は生殖力を人間に与える呪力を持つと信じられているようである。また、センザンコウは深い森に住む動物であるが、時には村にみずからやってくる。つまり区分を犯すともいえる」[吉田 1976: 167] (第1図参照)。

センザンコウの神秘性は、レレの動物分類では、「空間の区分を犯す」という意味においても変則的な動物であることに起因する、と解釈されている。この動物の象徴性については、

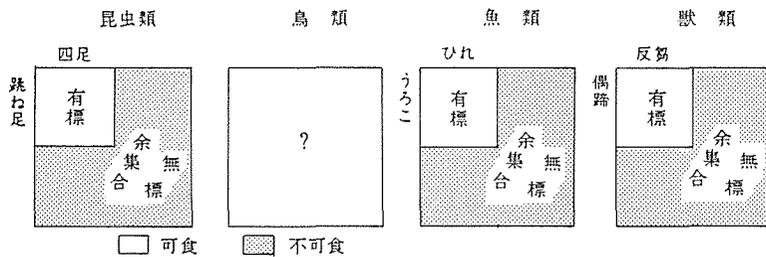
	反芻 $x$	非反芻 $\bar{x}$
偶蹄 $y$	牛 山羊 羊 かもしか 野山羊 くじか おおじか	豚
非偶蹄 $\bar{y}$	ラクダ 岩だぬき うさぎ	ロバ 馬 犬 ハイエナ ライオン (肉食獣)

□ 可食 草食    ■ 不可食 草食    ▨ 不可食 肉食



M.ダグラスの考えはこの  
ような時なら妥当である。

実際はこのよう  
になっている。



第2図 動物分類と可食・不可食の原則

ダグラスは『レヴィ記』の可食・不可食規定の分析を行った。(反芻・偶蹄)は、一つの範疇として存在する。それは可食である。これに対して、豚は、<非反芻・偶蹄>という特徴をもつ。ラクダは、<反芻・非偶蹄>という特徴をもつ。つまり、不可食というのは<反芻・偶蹄>という明確に区別された範疇の一部の属性をもっているが、他の属性を欠いている場合である。つまり、それらは、分類の越境者であり、中間的な存在であり、それゆえに、秩序に反する、危険な、遠ざけられるものとみなしている。第2図はダグラスの解釈を修正したものである。

ロイ・ウィリスも、レレのセンザンコウ、ヌエルの牛、フィバのニシキヘビとの比較を通して、人間と動物との関わりを論じている (Roy Willis, *Man and Beast*, London: Hart-Davis, MacGibbon, 1974, 小松和彦訳『人間と動物』, 紀伊國屋書店, 1979年。また、小田亮「タブーと象徴的動物」『構造人類学のフィールド』, 京都: 世界思想社, 1994年, 渡辺公三「多産の王と不能の王—クバおよびレレにおける王権の形成と否定—」『社会人類学年報』15 (1988): 31-57)。さらに、谷泰は、ダグラスの動物分類と可食・不可食原則モデルを批判している (「犠牲ヴィクテムの本質と機能—旧約聖書・レヴィ記再考—」『社会史研究』1 (1982): 164-237) (第2図参照)。

マイケル・ジャクソンは、シエラ・レオーネのクランコの事例をとりあげて、妖術師の幽霊と結びついている蜥蜴、村にやってきて家畜を殺す豹、ヒキガエル、蛇、ハイエナ、禿鷹などの不思議な動物を列挙している (M. D. Jackson, "Structure and Event: Witchcraft Confession among the Kuranko," *Man* (n. s.)10(3) (1975))。また、アフリカの事例ではないが、ニューギニア高地のカラムのヒクイドリをとりあげたものに、Ralph Bulmer, "Why is the Cassowary not a Bird?: A Problem of Zoological Taxonomy among the Karam of the New Guinea Highlands," *Man*(n. s.)2(1)(1967): 5-25がある。

### 3 食物禁忌と動物

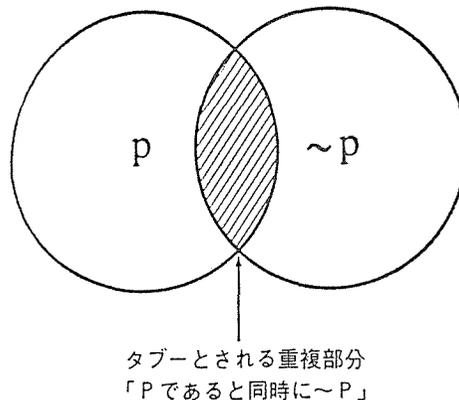
世界の諸民族における食物禁忌 (food avoidance) — 「豚」「牛」「鶏 (と卵)」「馬」「ラクダ」「犬」などを、先史時代から現代まで、文化史的にとらえたものに、Frederick J. Simoons, *Eat Not this Flesh: Food Avoidances from Prehistory to the Present*, Madison: The University of Wisconsin Press, 1994, がある (この文献目録は「動物禁忌」関係の基礎資料として役に立つ)。

動物の範疇に関しては、エドモンド・リーチの「言語の人類学的側面—動物の範疇と侮蔑語について—」という有名な論文がある (Edmund Leach, "Anthropological Aspects of Language: Animal Categories and Verbal Abuse," (in) E. H. Lenneberg (ed.), *New Directions in the Study of Language*, Cambridge: Massachusetts Institute of Technology Press, 1964, pp. 23-63, [諏訪部仁訳]『現代思想』4(3) (1976): 68-90)。

リーチは自己からの距離によって社会的な空間領域 (a) 人間, (b) 空間, (c) 動物を次のように分類している。

- (a) 自己 (I)・姉妹 (II)・イトコ (III)・隣人 (IV)・よそ者 (V)
- (b) 自己 (I)・家 (II)・耕地 (III)・原野 (IV)・遠方 (V)
- (c) 自己 (I)・ペット (II)・家畜 (III)・獲物 (IV)・野獣 (V)

リーチは、円Aと円Bという二つの円の集合論をもちいて説明している (第3図参照)。円Aと円Bという二つの円を交差させて、二つの円に共通する重複部分を「両義性」「禁忌」と定義している。これを社会的な空間領域に適用すると、重複部分を除いた円Aには (I), (II) が、重複部分には (III), (IV) が、重複部分を除いた円Bには (V) が該当するというモデルである。動物分類に説明を限れば、自己 (I) とペット (II) が重複部分を除いた



第3図 あいまいさとタブーの関係

円Aに、家畜(Ⅲ)と獲物(Ⅳ)が重複部分に、野獣(Ⅴ)が重複部分を除いた円B、というように図式化することができる。円Aと円Bとの重複部分にあたる家畜(Ⅲ)と獲物(Ⅳ)は「両義性」、「禁忌」なものであると定義している。この両義的動物には、聖性、価値、重要性、力、危険なものが備わっているとみなされている。これを「食物の禁忌事項」に置き換えれば、ペット(Ⅱ)はごく身近な動物たちで常に食用を禁止されている。家畜(Ⅲ)はそれ程身近ではない飼育動物で「未熟なもの」とか「去勢」されたものは食べられる。逆に、性的に成熟したものや去勢されていない家畜は食べられない。獲物(Ⅳ)は性的に成熟したものでも食べられるが、狩猟儀礼に従ってある特定の時だけ殺害することが許されている。野獣(Ⅴ)は食べられない。また、卵生で足をもたない蛇とか昆虫は敵意にみちた危険なものともみなされる [Leach 1964: 23-63]。さらに、動物をめぐる食物禁忌については、S. J. Tambiah, “Animals are Good to Think and Good to Prohibit,” *Ethnology* 8(1969): 423-459を参照されたい。

マーヴィン・ハリスは、『牛・豚・戦争・魔女』のなかで、インドの牝牛崇拜、ニューギニアの豚好き、未開部族の戦争、ヨーロッパの魔女狩りなどを主題として、いくつかの不可解な文化の「謎」を究明している (Marvin Harris, *Cows, Pigs, Wars, and Witches: The Riddles of Culture*, New York: Random House, 1974, 御堂岡潔訳『文化の謎を解く一牛・豚・戦争・魔女一』東京: 東京創元社, 1988年)。

#### 4 森の動物と町の動物

アサンテにおける王権の標章には、「猿」「鳥」「豹」「ヤマアラシ」「<sup>アンテロープ</sup>羚羊」「蛇」「象」「鯰」(泥の中に棲む魚の総称)などの動物が登場してくる。アサンテでは動物 (*m-moa*, *sing. aboa*) は現象学的なものという意味論的なものに分類される。動物の現象学的な分類とは、動物がどのような場所に棲むのかによって分類するもので、それらは、樹木に棲む動物 (*asorom-moa*)、陸に棲む動物 (*ntetem-moa*)、水の中に棲む動物 (*nsuom-moa*)、空中を飛

ぶ動物 (*ntummoa*) に分類される (T. C. McCaskie, “People and Animals: Constru(ct)ing the Asante Experience,” *Africa* 62 (2)(1992) : 221-247 ; M. D. McLeod, “Aspects of Asante Images,” (in) Michael Greenhalgh and Vincent Megaw (eds.), *Art in Society : Studies in Style, Culture and Aesthetics*, London : Gerald Duckworth, pp. 305-316 ; M. D. McLeod, *The Asante*, London : British Museum Publications Ltd., 1981)。

*asorommoa* 主に樹上(中)に棲む動物。*ɔsoro* (「上部」) と *mmoa* (「動物」) との組み合わせからなり、*asorommoa* は「樹上(中)の動物」を意味する。例えば、*asoroboa* とは「猿」の属名である。

*ntetemmoa* 主に地上に棲む動物。(a) *tete* (「足」) と *mmoa* (「動物」) との組み合わせからなり、*ntetemmoa* は「足のある動物」を意味する。例えば、*ateteboa* とは「四足獣」(通例、哺乳類)の属名である。

*nsuommoa* 主に水の中に棲む動物。*nsu* (「水」) と *mmoa* (「動物」) との組み合わせからなり、*nsuommoa* は「水の動物」を意味する。例えば、(n) *susono* [*nsu* (「水」) + *ɛsono* (「象」)] は「海馬」の属名(学名 *Hippopotamus amphibius*) である。

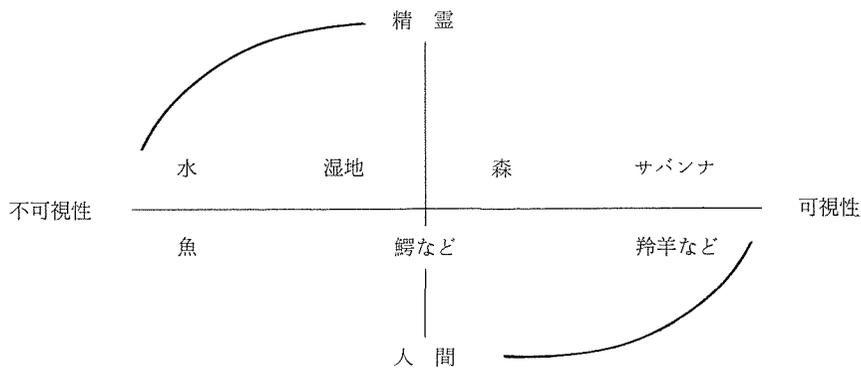
*ntummoa* 空中を飛ぶ動物。(o) *tu* (「飛ぶ」) と *mmoa* (「動物」) との組み合わせからなり、*ntummoa* は「飛ぶ動物」を意味する。この範疇には蝙蝠や鳥などが含まれる。より直截的には「鳥」は *ntakarammoa* (*atakara* 「翼」 + *mmoa* 「動物」), 「蝙蝠」は *hwenakro* (*ɔhwene* 「鼻」 + *mmoa* (動物)) と表現される。

また、動物の意味論的な分類は「集落」の分類体系に対応するものである。アサンテの集落語彙では、イエと森(藪)、内の世界と外の世界との対立は *efie* と *wura'm* で表現され、この境界は *kurotia* (*kuro* 「マチ」 + *tia* 「境」) と呼ばれている。*efie* は狭義では「居住」「炉」「家」を、広義では「内の世界」「人間の世界」を意味する。これに対して、*wura'm* は狭義では「草原」「森林」を、広義では「外の世界」「野生の世界」を意味する。*tia* は狭義では「終わり」「境」「周縁」を意味するが、この境には象徴的な<結界> (*pampim*) がもうけられることがある。これらの集落語彙との類推関係から、動物の意味論的な分類とは、動物が「マチ」の内側に棲むのか外側に棲むのかによって分類するもので、家畜 (*fiemmoa*)、森の動物 (*wura'mmoa*)、境界の動物 (*mmoatia* と *sasabonsam*) に分けられる。家畜の範疇には、鶏、羊、ヤギ、牛などが属する。この範疇に属する動物は犠牲の対象となるという特徴がある。森の動物の範疇には、象、豹、ヤマアラシ、鳥類、羚羊などが属する。境界の動物には怪物、赤い人喰いなどが含まれている。動物の意味論的な分類では家畜と森の動物は実体のあるものであるが、境界の動物は想像上の架空の動物である(第4図参照)。

*sasabonsam* はオダム(学名 *Chlorophora excelsa* クワ科の常緑樹) やオニヤ(学名 *Ceiba pentadrea* カボック [別名パンヤ]) と呼ばれる樹木に棲んでおり、妖術師と関わりがあるとされている。*sasabonsam* は好戦的な風貌をもった怪物であり、蛇のような頭に長い黒髪、燃え立つような赤い口、ずっと突き出た長い舌が備わっている。また、この怪物には蹄と長

空間	動物	色彩	冷/熱	生/死	神々	ントロ/モジャ
家 ( <i>efie</i> ) 町 ( <i>kuro</i> )	家畜 ( <i>fiemmoa</i> )	白	冷	生	家の神々 ( <i>fiabosom</i> )	ントロ原理
町の境 ( <i>kurotia</i> )	境界の動物 ( <i>mmoatia</i> )	白/黒/赤	冷/熱	生/死	境界の神々 ( <i>sasabonsam</i> )	ントロ/モジャ原理
森 ( <i>wura'm</i> )	森の動物 ( <i>wura'mmoa</i> )	赤	熱	死	森の神々 ( <i>wura'mbosom</i> )	モジャ原理

第4図 アサンテの動物分類



第5図 クバの動物分類

クバの動物分類は、生態系（「水」「湿地」「森」「サバンナ」）と空間（「精霊」と「人間」の世界）を基礎としている。動物は家畜（及び村に近接して棲んでいる動物）と森と湿地の動物に分類される。ジョン・マックは、「可視性」と「不可視性」という座標軸をもとに、クバの芸術ではなぜ動物の表象を利用するのかを解明している。これらは個々の創造的な行為ではあるが、集合表象としての物質的なイメージを表現している。

い尾があり、この尾をまいて樹上に坐わり、その翼でもって空を飛ぶという。

*mmoatia* は「小さい生き物」と呼ばれていてやはり森の中に棲んでいる架空の動物である。この動物は身長1フィート以下という立ち姿で極めて小さいが、曲がった鼻と黄色の膚をもち、両足は逆の方角を向いており、お互いに口笛の言語でやりとりをするという。この「一寸法師」の怪物は森の中にねぐらをもつが、最も好きな場所は岩場であるという。また、*mmoatia* には薬学の知識があり、薬草使いや呪医にその秘儀を伝承するという。アサンテにとって、*mmoatia* とは構造的な領域であると同時に反構造的な領域にも属するという意味で両義的な感情を表現したものである（K. A. Opoku, *West African Traditional Religion*, Accra: FEP International, 1978, pp. 72-73; McLeod, *The Asante*, pp. 39-40, 62; J. G.

Platvoet, *Comparing Religions: A Limitative Approach*, Paris and New York: Mouton Publishers/The Hague, 1982, pp. 42, 73-74, 268)。また、アサンテの色彩の象徴論では、家畜 (*femmoa*) が「白」「冷たい」(*dwo*) ものであるのに対して、森の動物 (*wura'mmoa*) は「赤」「熱い」(*ahohuru*) ものである。境界の動物 (*mmoatia* と *sasabonsam*) は「白」でも「赤」でもない「冷たい」ものでも「熱い」ものでもない両義的な存在である。

さらに、「森」と「町」という動物分類体系をもつ事例としては、ナイジェリアのベニン王国、ザイールのクバ王国に関する民族誌がある (Paula Ben-Amos, "Men and Animals in Benin Art," *Man* (n. s.) 11 (2) (1976): 243-512; John Mack, "Animal Representations in Kuba Art: An Anthropological Interpretation of Sculpture," *The Oxford Art Journal* 4 (2) (1981): 50-56) (第5図参照)。

## 5 語り と 動物

クバ王国の創世神話では「動物」と「植物」について次のように語られている。

「原初には闇だけがあり、地上は水でおおわれていた。この混沌の中で神であるブンバが支配していた。ブンバは白い巨大な人間の形をしていた。ある日ブンバは激しい胃の痛みをおぼえ吐き始めた。まず太陽を吐き、月を吐き、星を吐いた。こうして光が生じた。そして太陽の影響で水が蒸発し始め砂地が現われた。だが上をおおっていた水と同様、砂地にも動物も何の生き物も存在しなかった。ブンバは再び吐き始め、次のものを順々に吐き出した。まず豹、コイ・ブンバ。冠毛のある鷹、フォンゴ・ブンバ。鱶、ガンダ・ブンバ。小さな魚、ヨ・ブンバ。亀、コノ・ブンバ。雷 (豹に似ているが黒い獣)、ツェツェ・ブンバ。白鷺、ニャニ・ブンバ。黄金虫。山羊、ブディ・ブンバである。そしてたくさんの人間を吐き出した。……こうしてブンバの作り出した動物は世界中に殖えることになった。白鷺は鳥を除くあらゆる鳥を吐き出し、鱶はあらゆる蛇と蜥蜴を吐き、山羊はあらゆる角のある獣を吐き、ヨ魚はあらゆる魚を、黄金虫はあらゆる昆虫を吐き出した。その後、ブンバの息子のひとりニョニェ・ンガナが白い蟻を吐き出したが、その労苦のため死んでしまった。白い蟻は感謝のために地中を掘って不毛な砂の上に土をもたらし彼らを吐き出した者を埋葬した。もうひとりの息子チョンガンダは一本の植物を吐きそこからあらゆる植物が生じた。もうひとりのチェディ・ブンバという名の息子は新しい生き物を吐こうとしたが、鳥を吐き出しただけであった。」(Emil Torday and M. A. Joyce, *Notes ethnographiques sur les peuples communément appelés Bakuba ainsi que les peuplades apparentées-Les Bushongo*, Bruxelles: Musée du Congo Belge, 1911, p. 20; 渡辺公三「話すこと・食べること・黙すること—アフリカ、クバ文化における身体のフィギュール—」, 川田順造・野村純一編『口頭伝承の比較研究 [4]』, 東京: 弘文堂, 1988年, pp. 174-199。また、エミール・トルディについては、John Mack, *Emil Torday and the Art of the Congo, 1900-1909*, London: British Museum Publications Ltd, 1991; クバの民族芸術については、Joseph Cornet, *Art Royal Kuba*, Milan: Edizioni Sipiell, 1982。なお、クバの創世神話は渡辺公三訳による)。

クバの創世神話では、ブンバ及びブンバの吐き出した9種類の動物が口からの排出を繰り返

返すことであらゆる動植物を生み出すことが、語られている。渡辺公三は、この創造過程を「本来口から吐き出されるべき<言葉>を動植物という<もの>に置き換えたもの、あるいは、<出産>の過程を口に置き換えたもの〔嘔吐の苦しみ=陣痛?〕」と解釈している。つまり、宇宙生成と生命の発生は「ブンバ及び9種類の始源の動物の、いわば<容器>とも言える身体から口という通路を通して多様な生命が外界へと排出される」〔渡辺 1988:178-179〕 ことによって行われるのである。

## 6 アサンテの図像学にむけて

ここでは、アサンテにおける王権の標章に関して、図像学的に解釈してみよう。言い換えれば、王の神聖さや神秘的な力の根源、さらに、王権という不可視なものを可視的に表現される「モノ」の数々を通して、王国の維持・再生をはかるメカニズムを明かにしたい（なお、写真などの図版は、阿久津昌三「王権の標章」『季刊民族学』74（1995）：50-58を参照されたい）。

オジュラ祭には、王の椅子、日傘、語り部の杖、儀礼用の刀剣、歴史を語る太鼓、サンダルなど数々の王権の標章が登場する。それでは、なぜ、王権の存立基盤を動物の世界にもとめ、特定の動物を使って王の隠喩を表わすのであろうか。動物の表象は、これらの王権の標章に見られる大きな特徴となっている。これはアサンテの人びとが動物に対して畏敬の念ともいべき特別な観念をもっていることとも関わっている。

象、豹、ヤマアラシ、バッファローはいずれも「森の動物」であるが、これらの動物は「王」の隠喩として使われている。これらの動物は「王の力」を表現したり、王を賞賛するために使われている。動物の図像的表現はすべての王権の標章にみられるが、それらの意味は定型のものであったり、寓意的な表現であったりする。例えば、王の賞賛名が「籠のなかで眠る豹」であることも、豹のうなり声を模した太鼓も、凶暴な動物のイメージから王の権力と威厳を知らしめるのに役立っている。

また、王権の標章のひとつに語り部たちが使う「杖」がある。語り部は王の言葉を代弁したり、王に諮問したりする重要な役割を果たしている。王の発する言葉は危険なものであるとされているために、語り部たちは王が囁く言葉を代弁するのである。これらは超自然的な世界の「秘密」をあばくこと、つまり、動物や死霊の言葉からの引用であったりするために、王が危険にさらされるのを防ぐのも語り部の重要な役割である（「秘密」については Mary Nooter(ed.), *Secrecy: African Art that Conceals and Reveals*, New York: The Museum for African Art/Munich: Prestel, 1993を参照されたい）。

さらに、王権の標章には、犀鳥と蛇、鰐と鯰、鷹と豹などとの闘争という図像的表現がみられる。犀鳥を口にくわえた蛇は「不可能なことは存在しないこと」という寓意を表現している。鰐と鯰（泥のなかに棲む魚類の総称としてもちいる）との闘いは、鯰を口にくわえた鰐を表現したものである。これらの動物の闘いは実際に目撃されており、その闘争のようすを見たことで、過去に起きた出来事の遠い日々の記憶が呼び覚まされるのだ。

王権の標章は、王の従者とともに、神聖王権を表現するものであり、王の神秘的なく力>

がどこにあるのかをはっきりと具体的にくかたち>に表現するものである。その根源とは、王族の祖先たちであったり、森や大地や空に住んでいる超自然的な力をもった精霊たちであったりする。祭りなどに登場する数々の「モノ」は動物の表現に彩られて「神聖なる王」であることを視覚的に訴える。その権力のイメージを視覚的に表現するために王権の標章が利用されるのである。言い換えれば、王権の標章とは、不可視的なもの／無限なものを、可視的なもの／有限なものに変換するための装置なのである。

(追記) 本稿は、平成6年度文部省科学研究費補助金(一般研究C)「アフリカにおける王権、図像、歴史表象に関する民族学的研究」(課題番号06610282)及び平成7年度文部省科学研究費補助金(一般研究C)「アフリカ熱帯雨林における動物と植物の表象に関する民族学的研究」(課題番号07610310)の研究成果の一部である。

### 図版引用一覧

- 第1図 小田亮『構造人類学のフィールド』, 京都:世界思想社, 1994年, p.28.  
 第2図 谷 泰「犠牲ヴィクテムの本質と機能—旧約聖書・レヴィ記再考—」『社会史研究』1(1982): 195, 197.  
 第3図 Edmund Leach, “Anthropological Aspects of Language: Animal Categories and Verbal Abuse,” (in)E. H. Lenneberg(ed.), *New Directions in the Study of Language*, Cambridge: Massachusetts Institute of Technology Press, 1964, pp. 23-63.  
 第4図 阿久津昌三「血の匂いが好きな女神—アシャンティにおける性と文化表象—」, 和田正平編『アフリカ女性の民族誌(仮題)』, 東京:明石書店, 近刊.  
 第5図 John Mack, “Animal Representations in Kuba Art: An Anthropological Interpretation of Sculpture,” *The Oxford Art Journal* 4(2)(1981): 53.

### 参考文献

アフリカ民話の世界で語られるハイエナや兎などの不思議な動物については, [カグル] T. O. Beidelman, “Ambiguous Animals: Two Theriomorphic Metaphors in Kaguru Folklore,” *Africa* 45(2)(1975): 183-200; “Hyena and Rabbit: A Kaguru Representation of Matrilineal Relations,” *Africa* 31(1)(1961): 61-74; “Further Adventures of Hyena and Rabbit: The Folklore as a Sociological Model,” *Africa* 33(1)(1963): 54-69; “Humans and Animals: Stories and Subversion,” (in)T. O. Beidelman, *Moral Imagination in Kaguru Modes of Thought*, Bloomington: Indiana University Press, 1986, pp. 183-199; [ルバ] A. Bouillon, “Les mammifères dans le folklore luba,” *Zaire* 7(1953): 563-601; Leo Stappers, “Textes luba: contes d’animaux,” *Annales du Musée Royal de L’Afrique Centrale (sciences humaines)*41(1962); Thomas Reefe, *The Rainbow and the Kings: A History of the Luba Empire to c. 1891*, Berkeley: University of California Press, 1981 を参照されたい。鳥類と鳥ことばについては, [ベンバ] Vernon Brelsford, “Babemba Animal Medicines,” *Native Administration Department Annual (Rhodesia)* 18(1941): 8-11; “Bird Lore of the Babemba in Northern Rhodesia,” *Southern Rhodesia Native Affairs Department Annual (Rhodesia)*22(1945): 28-35; [鳥ことば論] David Guss(ed.), *The Language of the Birds: Tales, Texts, and Poems of Interspecies Communication*, San Francisco: North Point Press, 1985。また、いたずら者、文化英雄については, Robert Pelton, *The Trickster in West Africa: A Study of Mythic Irony and Sacred Delight*, Berkeley: University of California Press, 1989; Allen Roberts, “Heroic Beasts, Beastly Heroes: Cosmology and Chiefship

among the Lakeside Batabwa of Zaire,” Ph. D. Dissertation, The University of Chicago, 1980 がある。

森の動物については、[犀鳥] Anita Glaze, “Hornbill (*Gahariga*),” (in)S. Vogel(ed.), *For Spirits and Kings : African Art from the Tishman Collection*, New York : Harry N. Abrams for the Metropolitan Museum of Art, 1981, pp. 36-37 ; [羚羊] Bertil Söderberg, “Antelope Horn Whistles with Sculptures from the Lower Congo,” *Ethos* 31(1966) : 5-33 ; Wendy James, “Antelope as Self-Image among the Uduk,” (in) Willis, *Signifying Animals*, 1990, pp. 196-214 ; Filip de Boeck, “Of Bushbucks without Horns : Male and Female Initiation among the Aluund of Southwest Zaïre,” *Journal des africanistes* 61(1)(1991) : 37-72 ; [ライオン] Allen Roberts, “‘Perfect’ Lions, ‘Perfect’ Leaders : A Metaphor for Tabwa Chiefship,” *Journal des Africanistes* 53(1/2)(1983) : 93-105 ; [象] Doran Ross(ed.), *Elephant : The Animal and Its Ivory in African Culture*, Los Angeles : UCLA Fowler Museum of Cultural History, 1992 ; [豹] Malcolm Ruel, *Leopards and Leaders : Constitutional Politics among a Cross River People*, London : Tavistock, 1969 ; Kenneth Beatty, “Human Leopards : An Account of the Trials……” (in) *Sierra Leone*, London : Hugh Rees, Ltd., 1915 ; [蛇] Roy Willis, “The Meaning of the Snake,” (in)Willis, *Signifying Animals*, 1990, pp. 246-252 ; [足が魚の人像] Douglas Fraser, “The Fish-Legged Figure in Benin and Yoruba Art,” (in)D. Fraser and H. Cole(eds.), *African Art and Leadership*, Madison : The University of Wisconsin Press, 1972, pp. 261-274 ; Jacki Gallagher, “‘Fetish Belong King’ : Fish in the Art on Benin,” (in)P. Ben-Amos and A. Rubin(eds.), *The Art of Power, the Power of Art : Studies in Benin Iconography*, Los Angeles : UCLA Museum of Cultural History, 1983, pp. 89-93 ; [その他] Ronald Kuchta, “Antelopes and Elephants, Hornbills and Hyenas : Animals in African Art,” Exhibition Brochure, the Santa Barbara(CA) Museum of Art, 1973.

(1995年11月30日 受理)